

第Ⅲ章

寄 稿

子どもの心のケアについて

宮城県保健福祉部技術参事兼

宮城県子ども総合センター

医師 小野寺 滋実

今回、このように寄稿の機会を与えられたことに感謝申し上げる。この機会を利用して、私の所属する宮城県子ども総合センター（以降、子総と略）の紹介をしたいと思う。

子総は平成13年、多様な子どもの育成支援、人材育成、児童精神科診療を担う機関として、児童相談所から独立させた形で開設された。企画育成班（研修事業等を実施）、デイケア班（小中学生を対象とした子どもデイケアを実施）、クリニック班（児童精神科医療を実施）の3班から構成されていた。クリニックは、仙台を拠点に順次、大崎、石巻、気仙沼での出張診療を開始し、児童精神科医療を県内全域に提供する体制を整えそれを維持して来た。児童相談所との連携はもちろん、徐々に保育所、学校にも認知されるようになり、保育士、教員からの紹介も増えて来ていた。

その様な流れの中で、東日本大震災が発生した。発災後1年間は、3～4人の多職種ケアチームを数チーム編成し、沿岸部の地域を4地域に区分、分担し、ケアチームによる巡回相談を行っていた。2年目以降は、多職種ケアチームの活動を減らし、心理士と保健師による子育て相談チームを派遣して行った。平成24年2月には、東日本大震災中央子ども支援センター宮城県事務所が子総内に設置され、協力して子どもの心のケアに当たって行った。特にパラシュートを使った遊び（プレイメイク）を多くの保育所幼稚園で実施し、子ども達を力づけたことは印象に残っている。3年目以降は、7つの小学校を月1回の頻度で訪問し、メンタルヘルスに問題のありそうな子どもの把握に努め、学校の取組みのサポートを行った。

平成26年からは、子総内に心のケア推進班を設置し、子どもの心のケアチーム事業（市町、保育所、幼稚園、学校を、心理士や児童精神科医が定期的に訪問し、コンサルテーションを実施）、子どもの心のケア推進事業（保育士、教員向けの研修会開催）、子どもの心のケアマニュアル等作成事業（子どもの心を未来につなぐみやぎ子ども支援マップ作成、配布）を展開した。平成28年度まで3年間継続し、事業をみやぎ心のケアセンター（以降、センターと略）に引き継いだ。

平成29年度からは、センターが子どもの心のケアを担うことになり、これで子どもから大人まで全年齢をカバーし、より包括的に心のケアを行う事が出来るようになったと思われる。特に、センターは石巻や気仙沼にも地域拠点を持っているので、より地域密着型の支援を展開出来、期待されているところである。

一方、我が子総は、平成29年度以降は、平時に近い体制に戻り、今までの業務内容をより充実すべく所一丸となって努力して来た。振り返れば、震災前より児童精神科医療を県内全域に届けるべく、県内4か所の診療機能を維持して来た。震災後しばらくは、急性ストレス反応やPTSDなどのストレス関連障害が増えその対応に尽力して来た。最近は、震災の直接の影響よりは、震災により親、大人、周囲の環境の疲弊や悪化により間接的に子どもたちが辛い状況に陥ると言うケースが多い様に思う。不登校やいじめの背景には、震災の影響が大きいのかも知れない。私たちは、震災前からずっとそこで同じように診療を続け、そこにある、そしていざという時には、紹介できる頼りになる存在としてあり続けたいと願って診療を続けて来た。私自身も、月1回の気仙沼出張を12年間続けている。

そして、令和元年度から、子総に与えられた使命は、発達障害者支援センターの立ち上げと運営である。国の施策でもあるが、県民のニーズも高く、発達障害者支援の三次機能を主に担う県直営の発達障害者支援センターが令和元年7月にオープンする予定で、今急ピッチで準備を進めているところである。

震災後の混乱した生活環境の中、発達障害の子どもたちが、不適応を起こし顕在化した例が多くあったと思われる。発達障害の子どもたちにとって、生活環境や学校環境の影響は大きく、支援体制の整備が急がれるところである。平成31年4月、新所長のもと、発達障害者支援班が新たに加わり新体制で子総が動き出した。今後も、センターと協力しながら、子総に与えられた使命を果たして行きたい。これからもよろしくお願ひしたい。